

講演記録

原発問題を考える

岡野八代

本号に、井上利男さん、松久寛さんのご講演の記録、「郡山からの報告——放射線被曝した街の風景」、「原発事故と未来の縮小社会」をこうして公表できる運びとなったことを大変喜んでいますが、ここに掲載いたしますお二人の論考は、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科が主催している連続セミナー「グローバル・ジャスティス」で、2012年7月3日に開催されたご講演に基づいています。

2011年3月11日の東北大地震以後に起きた東京電力福島原発の事故は、じつは現在に至るまで終息の目途もつかず、かつ、放射能汚染被害が緩和されているわけでもなく、また、福島に限らず、放射能から逃れようと土地を離れた人たち、そして、これまでの生活と同じ暮らしをすることに決めた人たちの生活不安・将来不安はいまだ続いています。にもかかわらず現在、福島原発事故——福島で被害にあった方のなかには、これは事故でなく、「事件」だと呼ぶ人もいます——以降の、過酷な状況に置かれてしまった人びとの気持ちや生活をさらに踏みこむかのように、原発再稼働へと舵を切ろうとする動きが再浮上しています。お二人にぜひ、原発事故をめぐってお話していただきたい、井上さんについては遠く郡山市から京都にまでお越しいただくと考えた主催者の一人として、このような政治社会状況のなか、お二人のお考えが広く、より多くの人の手が届くことは、大きな喜びです。それと同時に、井上さんのように、福島からの現状を伝えようと様々な手段を使って、まさに体を張った努力をされている人びとが、以前よりもさらに声高に、原発事故被害について訴えなければならない状況に対しては、深い憤りを感じています。

わたしが井上利男さんの活動に初めて触れたのは、2012年5月20日に福島県郡山市で開催された「原発を問う 民衆法廷」という市民たちの手による、小さな取り組みを通じてでした。市民たちの手によって開催されるこの「法廷」は、2013年に入ってもなお、全国を巡りつつ順次開催されている試みです。郡山市で井上さんは、意見陳述という形で、以下に掲載される内容について語ってくれました。わたしがとりわけ井上さんのご報告に強い印象をもった理由の一つに、かれが『暗闇のなかの希望——非暴力からはじまる新しい時代』（七つ森書館、2005年）という、3.11以後の日本を予見したかのような書物の翻訳者であった

ことも関係しているかもしれません。この本には、つぎのような、暗い時代における正義とは何かを考える貴重なヒントがあります。

世界の状況は、物質的に見ても、戦争と経済の野蛮さの程度を見ても、過去 50 年間を通じて劇的に悪くなってきた。だが同時に、わたしたちは膨大な形のないもの——かつては目に見えず、想像できなかった対象を描写したり、実現したりするのに役にたつ、権利、理念、概念、言葉——を獲得してきたのである。これらのものが、わたしたちの息づく空間を広げ、わたしたちの希望の器、つまり残虐行為に立ち向かうための実用的な道具箱を豊かにする。[レベッカ・ソルニット『暗闇のなかの希望』、28 頁]

井上さんのご講演で表現された深い怒りは、ここでソルニットが述べるような「希望」を見いだそうとするがためなのだと感じています。

また、現在の日本社会に蔓延する欺瞞を鋭く告発する井上さんの講演と同時に、わたしは、かつて京都大学で機械工学を専門に研究され、現在では、「縮小社会研究会」を主催されている松久寛さんに是非お話をさせていただきたいと考えました。ご講演記録を読んでいただければ分かるように、松久さんは、3.11 以降のわたしたちは、近代産業革命以降の人間社会における文明そのものを問い直さなければならないとし、では、実際にどのような生き延び方が可能なのかを、分かりやすく説かれています。もし、原発推進派がいうように、原発に代わる代替エネルギーを手にすることが困難なのであれば、わたしたちは現在の生活水準を改め、現在手にしているエネルギーで持続可能な社会を構想するしかないのではなかいか。これは、言われてみれば単純な答えですが、そうした社会へと転換させることを踏みとどまらせているのが、わたしたちの常識に囚われた考え方に他なりません。

松久さんのより詳しい活動については、松久寛（編）『縮小社会への道——原発も経済成長もいらない幸福な社会を目指して』（日刊工業新聞社、2012 年）をお読みください。

お二人のご講演を読み、より多くの方が、常識に流され、疑問を呈しないことが、多くの人びとをさらに苦しめ、健康被害ほか、想定される様々な被害を拡大させていく、不正で暴力的な社会に加担していることに気づいていただけることを、主催者として望んでいます。